

公共図書館における「議論の場」 ーハーバーマスの公共圏の視点からー

花島 夏芽

今日、公共図書館は公共圏の一部を形成していると言われている。ユルゲン・ハーバーマスが論じた理想的な公共圏のように、公共図書館は〈公開性〉、〈共通の関心〉、〈議論〉に関連する要素を持つ。多くの先行研究で公共圏と図書館の関係性についての探索が行われており、公共図書館の研究領域において公共圏の「議論」の概念は普及しているといえる。しかし実際には、その普及と重要性にも関わらず、公共図書館がどのように議論の場として成立しているかは不明である。現代社会での公共図書館における「議論」の意義とそこでの役割を詳細に明らかにするにはさらなる研究が必要である。

本研究の目的は、民主主義社会の公共図書館における公共圏の議論の場とは何かについて、その全体像を文献を基礎に概念と事例の両面から明らかにすることである。具体的には、1) 議論の場としての図書館について文献でどのように説明され、どのような概念や要素が存在するのか、2) 図書館を議論の場として実際に活用している例にはどのようなものがあるのか、3) 民主主義社会における「議論の場」の構成要素とその全体像はどのようなものであるのか、3つの研究課題を解明する。

この問いに答えるために、公共圏と公共図書館に関連する文献を対象に分析をおこなった。本研究では、Widdersheim & Koizumi (2019)によって特定された120件を対象とし、これらから「議論の場としての図書館」に関連するキーワードを用いることで合計55件の著作を選定した。その後、文献を読み精密にメモを取ることで「議論の場としての図書館」に関連する公共図書館の要素を抽出した上で、その特性に応じて分類した。

分析の結果、図書館における「議論の場」の構成要素として、「政府」、「市民」、「公共空間機能」、「情報提供機能」、「市民教育機能」、「図書館員の認識・スキル」、「公共の議論」、「民主主義社会」の8つが明らかになった。「市民」では共通の関心を持ち議論の主体となる市民、特に社会的に立場の弱い人々を包摂する。「公共空間機能」では公共図書館は、多様な人々が交流する社会に安全で開かれた空間を提供する。「情報提供機能」では、公共図書館がe-governmentサービスを含む信頼できる情報を提供する。「市民教育機能」では、リテラシープログラムでの教育を通して市民に議論の教育を行う。「図書館員の認識・スキル」は、市民の関心事を取り入れたコレクションの形成などを行い、図書館機能を形成する。「公共の議論」では、公共の関心事が図書館によってイベントやコレクションを通じて提起される。「政府」は公共の議論の届く先であり、政府はこれを政策に反映させる。「民主主義社会」では、これらの要素を土台として図書館が民主主義を支えることを強調する。結論として、特に現代の公共図書館における「議論の場」の重要な概念と考えられる、図書館員の認識・スキル、社会的弱者（特に移民）、議論の場における相互作用、の3点について論じた。

(指導教員 小泉公乃)